2. 昭和35年中発生の食中毒原因菌の検索成績について

番号	発生月日	発生場所	摂取者数	患者数	原因食品	病原細菌	責任所在
1	6. 6	南都留郡河口湖町大石	26	21	ボタ餅	Staphylo coccus. aureus	家庭
2	7.12	中巨摩郡敷島町	2	2	タコ カマボコ等	〃	飲食店
3	8.27	富士吉田市 南都留郡河口湖町	151	51	アオヤギ等	好塩菌	仕出屋
4	9. 6	中巨摩郡白根町 〃 櫛形町	165	20	原因食者なし 患者便	Escherchia 0.125等	旅館
5	9. 7	南巨摩郡身延町梅平	5	2	フルーツ ミルク	不明	
6	9.26	南都留郡河口湖町			魚フライ・焼魚 ゆでたこ 折詰	Staphylo coccus. aureus	仕出屋
7	9.20	南巨摩郡身延町小田井原	4	4	まぐろ刺身 患者便	不明	
8	9.20	南巨摩郡身延町角打	2	2	しらす干 患者便	不明	
9	9.17	甲府身延間バス車中	41	8	ハム カマボコ	Staphylo coccus. aureus	旅館
10	9.21	中巨摩郡櫛形町沢登	4	4	あさり	Staphylo coccus. albs	魚貝類行商
11	9.21	塩山市上萩原	18	11	たこ	好塩菌	〃
12	9.14	大月保健所管内	443	290	まぐろ刺身	好塩菌	〃
13	9.14	大月市真木	63	45	たこ	好塩菌	〃
14	9.20	北巨摩郡高根村	19	7	さんまひらき	好塩菌	〃

以上表示のように，当所で行つた食中毒原因菌の検索14件中，菌を検索し得なかつたもの3件，検出したもの11件であるが，この3件中2件は，原因食品の提出がなく患者便のみについて行つたものである．原因菌を検出し得た11件中4件は，Staphylo coccus aureus Staph geo eoccus albs 1件で．これ等食品中圧倒的に多くの本菌を証明し得たのであるが9月26日河口湖町の折詰食品中には，1g中数億を算する本菌の発育を見たものもあつた．食中毒原因菌の検索に際し，魚貝類が推定原因食品の場合において，特に他の原因細菌検索に併行して，近時漸く注目されて来た好塩菌の検索を行い，番号11～14の4例及びNo 3の1例の中毒事例によりこれを分離した．厚生省においては，世論に鑑み最近病原性好塩菌の検査についての要領を示されるに至つたが，当所は従来神奈川県衛生研究所宮示本泰博士のされた検索要領に従い，本菌の検索を続けて来た．即ち好塩菌検索培地として，マソニツト NaCL 4%寒天，4%NaCL Mac konkey培地，4%NaCL普通寒天，3%NaCL加デソキシコー酸寒天培地等を使用し，これ等培地に発育した菌は，リン酸ペプトン水，3%NaCL加リン酸ペプトン水にて好塩性を，3%NaCLクリグラ培地の所見—/Aであり，3%NaCL加シモンズクエン酸培地に発育し，3%NaCLmannit Xylose 培地—/Aで，グラム陰性の運動性を認めた．cholera vibrioに形態的に稍々似ている菌株があることを確め，Skrieningの後，lmvicその他の生物学的性状を検して決定した本菌株4種は，その後神奈川県衛生研究所に送付し，SeloType の決定を依頼したところ，何れもⅦ型と同定された．

3. 五箇年間の赤痢菌型の推移と昭和35年中の赤痢菌薬剤耐性成績について

流行赤痢菌型の年次的変遷については，厚生省が実施した，昭和28年から昭和30年までの実態調査により，又その他多くの報告によつても，既に知られているところである．本県下における，昭和31年以降昭和35年までの

5カ年間の赤痢菌型の推移について，当所において検出分離したもの，及び県下各保健所の記録を調査し．記録の明確を欠くものを除外し，まとめ得た成績であり従つて，実際に県下に発生した数に及ばず，正確を欠く憾みはあるが，これをもつて大体のすう勢を察知するに足るものと信ずる．

抗生物質に対する感受性試験は，昭和35年1月から12月までの間において，当所で検出分離したもの，及び各保健所から送付を受けた赤痢菌株中，89株を抽出したものを資料とした．

イ．赤痢菌の推移

赤痢菌型の年次別推移の概要は，第一表に示す通りB群2a，2b，1bが圧倒的に多く70%～85%，D群Ⅰがこれに次ぎ15%～35%の間を往復している．昭和35年中D群Ⅰは35%の高率を示したのは，小笠原保健所管内櫛形町における，本菌の継続多発例があつたことに因るものである．然してB群中2a，2bは逐年減少の傾向が見られるが，B群3a及びD群Ⅰは著しい増加の傾向を示している．

第一表

菌型 / 年次	A群			B群											D群		計
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅵ	1a	1b	2a	2b	3a	3b	4a	4b	6	vx	vy	Ⅰ	Ⅱ	
31	0	0		4	31	36	68	13	0	5	4	4	1	0	25	0	197
32	0	8		2	4	39	18	18	0	0	1	0	10	0	27	2	129
33	0	0		3	9	94	26	32	0	3	0	0	2	3	42	0	214
34	0	2		6	2	36	44	55	5	3	5	6	0	2	19	4	189
35	14	21	1	12	12	51	26	80	9	9	0	14	5	0	131	0	379

ロ．感受性試験

供試赤痢菌は，第二表の通り89の各菌株について，衛生検査指針に従い，生物学的，免疫学的，諸性状を再確認し検査に供した．

D群1相48株は昭和35年中小笠原及び甲府保健所管内に，集団発生の際検出分離した菌株であつた．

第二表

菌型	AⅢ	F1b	2a	2b	3a	4b	6	VX	DI	計
株数	3	2	19	5	9	1	1	1	48	89

ハ．試験方法

使用薬剤は，栄研製Sensitivity kitを用い，Tetracyclin (T.C) Strepto mvsin (S.M) Chloram phenical (C.M) の三剤について実施した．供試菌株はBouillonに18時間培養せるものを，各濃度の薬剤を含むHeart infusion培地上に画培線養を行い，対照培地と比較し，略同様の発育を示したものを耐性菌と看做した．

三剤に対する感性は，次表に示す通りである．

TCに対する感性成績

	100	50	25	12.5	6.25	3.12	15.6	0.78	0.39	計
AⅢ	1					2				3
F1b						1	1			2
2a					1	6	2	1	9	19
2b		1					3	1		5
3a							2	3	4	9
4b							1			1
6							1			1
VX						1				1
DI		2			4	25	15	2		48
計	1	3			5	35	25	7	13	89

SMに対する感性成績

	100	50	25	12.5	6.25	3.12	1.56	0.78	0.39	計
AⅢ						3				3
F1b								2		2
2a		1				12	4	2		19
2b							4	1		5
3a						5	4			9
4b							1			1
6							1			1
VX							1			1
DI				1	2	13	29	3		48
計		1		1	2	33	44	8		89

CMに対する感性成績

	100	50	25	12.5	6.25	3.12	1.56	0.78	0.39	計
AⅢ							2	1		3
F1b		1					1			2
2a			2				5	3	6	19
2b			2				2		1	5
3a							4	2	3	9
4b			1							1
6			1							1
VX							1			1
DI		1				14	32	1		48
計		2	6			17	47	7	10	89

二．総　括

以上昭和31年から35年に亘る，山梨県下の赤痢菌の推移と，昭和35年中検出分離した89株の赤痢菌株についての，抗生物質に対する耐性検査成績を示したが，赤痢菌型の推移については，菌株収集の点から難点はあるが，概ね本県の流行菌株である2aは，毎年20%～30%の間を示し，2bは遂年僅かながら減少の傾向を示し，B3aとD1は増加の傾向がうかがえるようである．又抗生物質に対する耐性については，89株中TCに対し100r耐性A群Ⅲ1株，50r耐性B群261株，DI 50r耐性2株，SMに対しては2a50r耐性1株，CMに対しては50r耐性DIに1株を発見したのみで，他県に比較し著しく低率であると考えられる．